

# カントと「ミステイシズム」

山 根 雄一郎

## Kant und „Mystizismus“

Yuichiro YAMANE

In dieser Abhandlung versuche ich zuerst zu bestätigen, daß sich der Terminus „Mysticism[us]“ nicht erst im 19., sondern bereits im 18. Jh. beim Kantkorpus herausfinden läßt, und dann klarzustellen, daß er dabei – wie der Artikel „Mystik, mystisch“ im *Historischen Wörterbuch der Philosophie* so darstellt – mit dem vom klassischen Latein herkommenden Ausdruck „Mystik“ nicht nur gleichbedeutend verwandt worden sei, sondern daß er vielmehr im Rahmen der Vernunftkritik Kants sogar eine eigene Rolle spielen kann. Im Hintergrund der Entstehung solch eines dem kritischen Denken eigentümlichen Begriffs „Mysticism[us]“ sehe ich denjenigen gewissen Einfluß vom katholischen Quietismus im 17. Jh. auf den Pietismus im preußischen 18. Jh., der wahrscheinlich erst vermittelt der möglichen Rezeption der einigen Kenntnisse aus dem Kompendium Johann Lorenz Mosheims (1693-1755) zu verstehen ist.

冷静な批判こそ真の浄化剤 Kathartikon であり、妄想を  
[...] 排出するだろう。——『純粹理性批判』[A486/B514]

### 序 問題設定

本稿の表題の一部をなす「ミステイシズム」は通例「神秘主義」と訳される。試みに手近な国語辞典を繙くと、「**神秘主義** (mysticism) 神・絶対者・存在そのものなど究極の實在になんらかの仕方で帰一融合できるという哲学・宗教上の立場。東洋ではインドのヨーガ、中国の道教・密教、イスラムのスーフィズム、西洋ではプロティノスに始まり、新プラトン学派、エックハルト・ベーメらのドイツ神秘主義、現代ではハイデガーなどが代表的。」とある（岩波書店『広辞苑』第5版）。注意しておかねばならないが、ここに列挙された古代から近世初頭にかけて出現した思想家ないし思想潮流が、みずから「神秘主義」というキーワードを用いたわけではない。理由は単純で、こんにち「神秘主義」という日本語に対応づけられる西洋近代語（英 mysticism, 独 Mystizismus, 仏 mysticisme）<sup>(1)</sup> 成立それ自体が比較的新しいと見られるからである。「神秘主義」（“mysticism”の訳語）という名詞自体が一九世紀

の新造語である。「キリスト教神秘家」とされる人々が活動していた時代にはこの語は存在していなかった。」と、この間の事情を説明する論者も見受けられる<sup>(2)</sup>。

本稿は、こうした見解にもかかわらず、「神秘主義」という語（に対応づけられる西洋近代語、とりわけドイツ語 *Mystizismus*）の成立が、少なくとも18世紀に遡り得ることを、それを生み出した汎ヨーロッパ的背景にも注意しながら、イマヌエル・カント（1724-1804）の哲学文献に即してまず確認し、次いで、彼の批判哲学におけるこの語の用例を検討することにより、彼がこの語に託した内実を明らかにしつつ、この哲学の現代的意義の一端を示唆すべく試みるものである。

議論に先立ち、本稿における術語表記の問題に触れておく。以下では、*mysticism*, *Mystizismus*, *mysticisme* という三つの西洋近代語に対応する日本語として、「神秘主義」に代えて、「ミスティシズム」という片仮名書きを便宜上そのまま用いる。やはり「神秘主義」と訳され得る別のドイツ語 *Mystik* をカントは少なからず用いているため、行論の混乱を避けることが主たる目的である。それだけならば、上記の三ヶ国語をそれぞれ近似的に音写して仮名書きに移すことも考えられる。しかし、特にドイツ語 *Mystizismus* の場合、当代の表記が *Mysticism* や *Mysticismus* のように未だ安定しない上、同一本文でも校訂版により個々の単語の綴字に差異が見られるのがむしろ一般なので、これらをも英仏語ともども愚直に音写することは、かえって紛らわしく煩瑣にすぎると判断した。カント哲学をめぐる一試論にもかかわらず、その表題に「ミスティシズム」というドイツ語の響きとは異質な表記を取って採用した所以である。なお *Mystik* のほうは適宜「神秘説」と訳すことにする。

## I 予備考察 — 西洋近代語における「ミスティシズム」の初出

本節では、各国語の辞書を手掛かりとして、現時点における標記の問題状況を概観する。まずフランス語の場合、リットレのフランス語大辞典は、作家 B・コンスタンの用例を挙げつつ、「ミスティシズム」の語を1804年初出とする。前節に見た「19世紀成立説」に呼応する明快な記述である。

肝腎のドイツ語の場合、18世紀半ばにツェドラー *Johann Heinrich Zedler* が編纂した60巻以上に及ぶ大辞典 (*Grosses vollständiges Universal-Lexikon*) はもとより、かのグリムのドイツ語辞典にも、そもそも「ミスティシズム」の項目が存在しない。もっとも、周知のように、グリム兄弟自身による編纂作業はMの部に達することなく中絶したのではある。いずれにしても、1838年に編纂が開始されたこの浩瀚な大辞典からドイツ語圏における「ミスティシズム」の初出状況を窺うことはできない。

他方、去る2004年に本文篇の完結した『歴史的哲学事典』(*HWPh*) には「神秘説、神秘的」の項目が立てられ、その枠内で「ミスティシズム」への言及が見られる<sup>(3)</sup>。その初出はカントに関してである。ところが、そこでは、タウラーとかビンゲンのヒルデガルトとかいった中世の神秘思想家やクザーヌスや「バロック時代」の思想家における「神秘説」を概観する論述からの展開とは不連続に、「ミスティシズム」という表現が、その直接の源泉に擬せられ得る文献への言及抜きに唐突に導入され、カントにおける「神秘説ならびにミスティシズム」<sup>(4)</sup> という仕方で、無造作に等置される。専らドイ

ツ語圏の思想的伝統という閉鎖的時空のみがカントの「ミステシズム」概念（とされるもの）の特権的な揺籃であるかのような印象を与えかねないこうした概念史的叙述は、本稿が次節以下で検討するとおり、それ自身、相対化される必要がある。が、目下のところこの点は措く。それにしても、「ミステシズム」の初出状況を読み取ることができない限りで前記のグリムの辞典と同断ではあるにせよ、「しばしば<ミステシズム>という語に分節されもする神秘説に対する哲学的な批判は」云々といった後続の記述から窺えるように、「ミステシズム」というドイツ語の成立には *Mystik* などの語が先行するのであって、その逆ではないであろうという一点は、ともかくも *HWP* に基づいて確認される。

最後に英語の場合である。『オックスフォード英語辞典』(OED) には「ミステシズム」の項目がある<sup>(5)</sup>。そして、この語の「19世紀成立説」にとっては意外なことに、1736年と1765年という、18世紀における二つの用例が明示されている点が注目される。本稿が関心を寄せるカントの、学者としての活動時期とも重なる後者の例文を引用する。“This female apostle of Mysticism derived all her ideas of religion from the feelings of her own heart.” 出典は、“MACLAINE tr. Mosheim’s *Eccl.Hist.* Cent. XVII. II.I.i.§51.” とされている。

以上から、「ミステシズム」という英単語の成立が18世紀に遡り得ること、また、Mosheim という人物が英語以外の言語で著した書物を出典とすることから、この語が他言語からの翻訳の過程で外来語として成立したらしいことが、差し当たり知られる。とは言え、前後の脈絡から孤立した件の例文から、この「ミステシズム」の何であるかを推し量ることはできない。そこで、OED が挙げている MacLaine による英訳書と Mosheim による原書の双方を対照し、「ミステシズム」と訳された原語が何であり、いかなる思想の謂であるのかを確定する必要がある。

## II キエティズムの性格規定としての「ミステシズム」

MacLaine を訳者として1765年に刊行された Mosheim の著書 “*Eccl.Hist.*” という情報に基づく限り、この英語の書物は、18世紀北ドイツのプロテスタント神学者で「近世教会史記述の父」<sup>(6)</sup> と呼ば習わされる歴史家 J・L・モスハイム Johann Lorenz Mosheim (1693-1755) を原著者とする『教会史 *An ecclesiastical history*』<sup>(7)</sup> を指すと解される。とすると、その原本は、モスハイムがラテン語で著した『教会史教程 *Institutiones historiae ecclesiasticae*』<sup>(8)</sup> である。これの初版は1726年に出され、モスハイム自身による最後の改訂版がその没年に当たる1755年に刊行された<sup>(9)</sup>。1765年の英訳の底本は後者と考えられる。

「ミステシズム」の語を含む件の例文に相当する一文は、確かに OED の指示通りの場所に見出される。ただし正確には “This female apostle of Mysticism derived all her ideas of religion from the dictates of her own heart.” であり、下線を付した語が異なる。それはさておき、当該箇所<sup>(10)</sup> に関して、ラテン語原著と英訳書とを比較対照して直ちに気づかれるのは、かの例文に逐語的に対応するラテン文が見当

たらないことである。英訳書の OED 例文の前後を含む箇所に対応する部分はラテン語原著ではこうである：

「静寂主義的な教えをガリアで諸著作を通じて広めたと見なされたのが MARIA BOUVIERES DE LA MOTHE GUYON である。この卓越した女性は、確かに心魂悪しからず欠けたところのない生を送った人ではあったが、変わりやすい気質の持ち主で、彼女自身の感情をよりどころとしたのだが、宗教<sup>(11)</sup>の本性を明示するもので感情ほど人を欺くものはないのである。」

英訳書では次のようである（OED 例文は下線部に対応）：

「フランスにおける静寂主義の主要な保護者にして唱道者のひとりが MARIE BOUVIERES DE LA MOTHE GUYON であった。その心魂の善さと所作の均斉のゆえに際立っていたものの、気まぐれで不安定な気質の女性であり、熱狂的で抑制の利かない空想の魅惑に惹きつけられることがままあった。ミスティシズムのこの女性使徒は宗教に関する彼女の思念のすべてを自分の心魂の命ずるところから得てきたのであり、他の人々に対しては、宗教の本性を、彼女自身がそれを感じ取ったところに従って説明したのである。何であれその他の事柄に関しては、振る舞いの仕方はまったく不確実で妄想に満ちていた。」

見られる通り、英訳は原書にない記述をかなり説明的に補っていることが分かる<sup>(12)</sup>。もっとも、これだけならば、例えばバウムガルテン著『形而上学』のマイアーによる独訳が逐語訳には程遠いかなり自由な意識の趣が濃い、といったカント研究者なら周知の事実を思い起こすまでもなく、当代の翻訳のあり方に照らして、さして異とするに当たらないことではあろう。ところが、目下の場合には別のいっそう根本的な問題が存する。OED 例文に対応すべき、「ミスティシズム」に置き換えられるラテン語を含む文は、18 世紀ドイツで書かれた原著にはもともと存在しないのであって、英訳の際に訳者が創作して説明的に挿入したのではないか、との推測が成り立ち得るからである。

実際、17 世紀初頭にドイツ中部で刊行されたゴクレニウス著『哲学辞典』<sup>(13)</sup>には *mysterium* と *mysticum* の項目はあるが、\**mysticismus* のような語形は件の項目の説明の中にすら現れない。18 世紀の学術語をラテン語・ドイツ語対照の形で集成した『羅独 - 独羅学術語彙辞典』<sup>(14)</sup>にも「ミスティシズム」に相当するラテン語は収録されていない<sup>(15)</sup>。原著の問題の箇所の前後に見られるのは *Mysticae* や *mysticum* といったウェルギリウスに用例をもつ *mysticus* から派生した語形のみである。

さて、そうであるとするなら、ここでは、*Mystica* や *mysticum* といった表現で事柄として何が意味されているのか、このことを確認することのほうがむしろ重要だと言えるであろう。目下問題の、ラテン語原典とその英訳（からのふたつの訳文）を改めて見てみよう。すると、そこでは、17 世紀後半から 18 世紀初頭にかけて西欧カトリック圏を風靡した、「静寂主義 Quietism（英）」ないし「静寂主義的 Quietistica（羅）」な近世キリスト教における神秘思潮、すなわち「キエティスム」<sup>(16)</sup>をめぐる話題が取り扱われていることが分かる<sup>(17)</sup>。英訳（からの訳文）において、OED 例文の主語である「この女性使徒 This female apostle of Mysticism」が直前の“MARIE BOUVIERES DE LA MOTHE GUYON”すなわち「ギュイヨン夫人」を受けていることは、容易に見て取られるからである<sup>(18)</sup>。

以上の検討から、18世紀中葉には、こんにち神秘主義思想の一類型として了解されるキエティズムの性格規定として「ミスティシズム」という英単語が用いられていることが確認される<sup>(19)</sup>。ここにおいて、かの「神秘主義」(“mysticism”の訳語)という名詞自体が一九世紀の新造語である。」との説には少なからず疑念が生じるのではあるが、ともあれ、次の課題は、英国から遥かバルト海を隔てつつも海上交通を介してそこと緊密な関係を保った東プロイセンの首府ケーニヒスベルクに生きたわれわれの哲学者<sup>(20)</sup>と「ミスティシズム」という言葉との、あり得べき関わりを明らかにすることである。

### III カントとモスハイム

カントの公刊著作ならびに遺された手稿断片におけるモスハイムへの言及は皆無である。両者間に直接の交流もない。従来のカント研究において両者の関係が顧みられることはなかった、と言ってよいだろう。しかし、自分より31歳年長で、晩年の1747年以後はゲッティンゲン大学の神学部教授を務め、自著『諸学部の争い』の献呈相手となる神学者シュトイトリン(1761-1826)の師にも当たる、この同時代の神学者の存在を、カントがはっきり認識していたであろうことは、以下の理由から疑いの余地がない、と考えられる(なおコヴァレフスキが伝えるボロフスキの証言によれば、カントは対話の中でモスハイムの名を口にしている)。

第一に、カント自身が(宗教哲学ではなく)形而上学の講義準備のためと見られる覚書をそこに書き込んでいた<sup>(21)</sup> J・A・エーバーハルト著『自然神学序説』(1781年刊)<sup>(22)</sup>に、17世紀イングランドのケンブリッジ・プラトン学派のひとりであるカドワース Ralph Cudworth (1617-1688)の英語著作『宇宙の真なる知性的体系』(1678年刊)の、1733年にイエナで刊行されたモスハイムによるラテン訳<sup>(23)</sup>への言及があること[XVIII 588]。第二に、カントによる哲学史講義のみならず哲学史一般についての情報源と目されるJ・ブルッカー(1696-1770)による『批判的哲学史』(1767年刊)<sup>(24)</sup>においても、この書物が少なからず引照されていること<sup>(25)</sup>(——しかもその際、ブルッカーが、カドワースによる地の文からではなく、むしろそれに付されたモスハイムによる膨大な註解から、用語法について影響を被っているとみられる箇所もあるという<sup>(26)</sup>)。第三に、カント自身がこの書物を所蔵していた事実が確かめられること<sup>(27)</sup>。そして第四に、本稿の議論にとって特に重要なことであるが、18世紀後半のケーニヒスベルク大学神学部の教会史講義の多くにおいて、前節に見たモスハイムの『教会史教程』(ラテン語原著のほう)が教科書として用いられていた事実が確認されることである。

最後の点について、近年翻刻されたケーニヒスベルク大学の講義科目一覧<sup>(28)</sup>に即して概観しておく。それによれば、モスハイムによる『教会史教程』を教科書に指定した授業科目が初めて確認されるのは1757年夏学期である。著者自身による最後の改訂版が刊行されたのは、著者の没年でもある1755年のことであった。科目一覧の翻刻編者は、本稿が前節で問題にしたこの1755年版こそ当の教科書であるとしている。なお、1755年は、カントが冬学期から私講師としてケーニヒスベルク大学哲学部の教壇に立つこととなった年でもある。以後、1760/61年冬学期、1761年夏学期、1762/63年冬学

期、1771 年夏学期、1771/72 年冬学期、1772 年夏学期、1772/73 年冬学期に、正教授 T・Ch・リリエントール Theodor Christoph Lilienthal (1717-1782) が『教会史教程』を用いた講義を予告している（—— この間、1770 年 3 月にカントは哲学部正教授に就任）。続く 1773 年夏学期には、やはり神学部正教授の J・A・シュタルク Johann August Starck (1741-1816) が件のモスハイム著を用いて私講義を開く一方で、リリエントールが公講義で「同じものを eodem」過去 4 学期に引き続いて扱うことが予告され、さながら競争講座の観を呈しているのは興味深い。シュタルクの私講義は翌 1774 年夏学期にも予告されている。その後しばらく間を置き、1779 年夏学期、1780 年夏学期、1781/82 年冬学期、1782 年夏学期（「ルターの改革から現代まで」の文言あり）には、今度は G・Ch・ピザンスキ Georg Christoph Pisanski (1725-1790) がモスハイム著を用いた教会史講義を担当し、再び間をおいて 1792/93 年冬学期と次の冬学期にはいずれも「宗教改革史」と銘打って J・H・Ch・グレーフ Johann Hartmann Christoph Gräf (1744-1820) が同様の講義を予告していることが知られる。

もともと、本文千頁を優に上回る原著が各学期ごとにその都度すべて講義されたとは考えにくい。1771 年夏学期から同名の講義が 5 学期連続で予告されているが、この事実は、数学期かけてようやくテキスト全体が扱われる旨を示唆するのも知れない。各学期ごとの具体的な講述箇所についての情報も断片的にとどまっている。とは言え、講義科目一覧を一瞥する限り、当代のケーニヒスベルク大学においては他にもモスハイムの著述（のみならずその参考書すら！）を素材とした授業科目が存在する事実<sup>(29)</sup>をも併せ考えるならば、モスハイムが『教会史教程』に展開した歴史記述は大学公認のものとしてケーニヒスベルクの学者共和国の言わば知的共有財だったのであり、カントもまたそうした風土の中で自己の思索を鍛えていたのである以上、こと教会史に関する知識と言え、それを批判するにせよ受容するにせよ、カントの身近に存在したはずのこのモスハイムの著作も確かにひとつの源泉をなしていた、と考えてよいのではないだろうか。

なるほどカントがモスハイム著『教会史教程』を直に読んだと断定し得る証拠は従来のところ見出されてはいない<sup>(30)</sup>。では、果たしてこの書の影響を傍証するに足るカント文献が存在するだろうか？——確かに存在する、と答えよう。前節末に提起しておいた、モスハイムの論述における「ミステシズム」とカントにおける「ミステシズム」とを脈絡づけるための補助線を与えるべく、節を改めてこの問題を検討することにする。

#### IV キエティズムを透過したピエティズムスへの視線

##### ——近世西欧を横断するミステシズム水脈の一断面

モスハイム著『教会史教程』が「ミステシズム」に相当する思想としてキエティズムを念頭に置き、その代表的人物としてギュイヨン夫人を挙げていたことは先に確認した。注目すべきは、カントもまた彼女に言及していると見られることである——それも実質的な「ミステシズム」批判の文脈において。第一批判に結実する批判的思考が熟しつつあるか第二、第三のさらなる批判書に向けて具体

的に展開しゆく時期、すなわち、1776年から翌々年にかけての頃かまたは1780年代に書き留められたとされる「人間学についての覚書 *Reflexionen zur Anthropologie*」第504番がそれである。

「思考のはたらきをすべて捨象する人は馬鹿げて Blodsinnig いる。恣意を排して対象に傾注する人は深み Tiefsinnig がある。自分の思想をさしたる根拠もなしに変更する人は狂乱の気 Unsinnig がある。目覚めていて感能と幻想の区別がもはやつかない人は狂想状態 Wahnsinnig にある。真なる諸前提から誤った理屈をこねる人は錯乱して Wahnwitzig いる。(後置 Nachstellen。) なんの原則にもよらずに理屈をこねる人は正気でない Aberwitzig。内的な靈感または麻薬によって<sup>(31)</sup> [理屈をこねる人は] 精神異常 Verrückt である——自惚れ Hochmuth。[ ] 狂信者 Schwärmer と偽善者 Mucker はどちらも書物狂い schrifttoll である。ヘルンフト兄弟団員 Herrenhuter<sup>[sic!]</sup> とピエティスト、ベーム Böhm<sup>(32)</sup>。ギュイヨン Guyon。」[XV 219; Refl.504]

以上が全文である。見られるように、文末で洗礼名抜きに単に「ギュイヨン Guyon」とだけ言及されるのだが、夙にアカデミー版の校訂者アディッケスは脚註でこれをギュイヨン夫人に比定し、近年ではヒンスケもこの見解を踏襲している<sup>(33)</sup>。ここでカントは、「書物狂い」の「狂信者」や「偽善者」の実例として、「ヘルンフト兄弟団員」や「ピエティスト」<sup>(34)</sup>と並べてギュイヨン夫人を挙げている、と考えられるわけである。「書物狂い」とは、公刊された『実用的見地における人間学』での語釈に従えば、「或る種の神聖でごたいそうな口吻を保った書物」<sup>(35)</sup>を読むとき、専らその文字面にすっかり幻惑されてしまい、道徳的な事柄を同時に顧みることをしない性癖[VII 218]の謂である。要するに、聖書に接する際に、そこに盛られた「道徳的な事柄」を反省（これは理性の営みである）せず、その記述を理性的に吟味することもなく丸呑みして情動的に一体化してしまう、さながら神に酔える人を指すに他ならない。『諸学部之争い』序文のための準備原稿（1798年以前）には、聖書の読者が陥りがちな「文字の信仰 Buchstabenglaube」を直ちに Mysticism と言い換えている箇所も見出される[XXIII 424]。

これらのことをも踏まえつつ、モスハイムのラテン語原著において、ギュイヨン夫人が「変わりやすい気質の持ち主で、彼女自身の感情をよりどころとしたのだが、宗教の本性を明示するもので感情ほど人を欺くものはない」と描写されていたこと<sup>(36)</sup>を念頭に置くなら、目下のところ問題の「覚書」でカントが、ギュイヨン夫人を、「自分の思想をさしたる根拠もなしに変更する」「狂乱の気がある」人とか、専ら自身の「感情」をよりどころとして「なんの原則にもよらずに理屈をこねる」「正気でない」人とか、さらには、聖書によってでなく「内的な靈感」によって理屈をこねる「精神異常」者とかの典型例として持ち出しているのだとしても、それは少しも不可解ではないことになるであろう。

ここで確認すべきことが差し当たり二点ある。第一には、ギュイヨン夫人がそれだとされた「狂信者 Schwärmer」の同族語である「狂信 Schwärmerei」こそ、18世紀後半において、先に見立てておいたようにラテン語起源を装って造語された疑いの濃厚な<sup>(37)</sup>ドイツ語「ミステシズム」の同義語としてむしろ一般に流通し<sup>(38)</sup>、実際カント自身もこのほうを多用していた当の言葉だということである。

言い換えるなら、カントによるここでの Schwärmerei への批判は、先に見た『諸学部之争い』序文のための準備原稿での語法からも窺われるように、事実上「ミスティシズム」への批判として理解し得ることである。

第二には、かかるものとしての「ミスティシズム」批判の標的は、当然ながらギュイヨン夫人その人ではなく、モスハイム著『教会史教程』から得られたであろうその限りでのキエティズムとその代表選手としての彼女に関する知見を媒介として、彼女と併記された「ピエティスト」に特有のミスティシズムへの批判を——具体的には、「良心の主観性」にとどまり「人間の内的心情の純粋性のみにもっぱら関心を向け」る<sup>(39)</sup> 彼らの根本態度への批判を——、婉曲に、しかし決然と表明することにこそカントの真意があった、と見るべきであろうことである。実のところ、ミスティシズムの一類型としてのキエティズムの、ピエティズムスへの思想的影響ということそれ自体は、すでに指摘されて久しい<sup>(40)</sup>。本節の考察では、カトリック・ロマンス語圏のミスティシズムの、プロテスタント・ドイツ語圏のそれへのあり得べき影響作用が、カントが人間の心情の諸相を書き留めた覚え書きから読み取られるその消極的・批判的な描写の分析を橋渡しとして、確証され得ることを、具体的に示した。

さて、事柄としてのミスティシズムに対するカントの以上のような態度は、その批判的思考に通底するものでもであろうことが、今や当然に予測される。次節では、カント自身による「ミスティシズム」というドイツ語の用法に踏み込みつつ、このことを見定めることにしたい。

## V ミスティシズムとミステイク（神秘説）

1800年、カントの最初期の伝記作者のひとりとして著名なヤッハマン（1767-1843）が、『カント宗教哲学の吟味——純粹ミスティシズムとのその類似という見地における』を著した際、カントはそれに同年1月14日付で短いが密度の濃い序文を寄せた。そこに次のような一節がある。「さて、知恵というものは、上から下って（靈感 Inspiration によって）人間へと注ぎ込まれるのか、それとも下から上へと人間の実践的理性の内的な力によって獲得されるのか、これが問題である。[ ] 受動的な認識手段として前者を主張する人は、超感性的経験の可能性というたわごとを考えている。これは「思考している当の」自分自身と完全に矛盾したこと（超越的なことを内在的と考えること）である。この人は神秘説と称される或る種の秘密学説 Geheimlehre に基づいているが、神秘説はあらゆる哲学とは正反対の代物である [...]」。[VIII 441]

C・A・ヴィルマンズ（1772-1848）なる若者が、ラテン語による学位論文「純粹ミスティシズムとカントの宗教論との間にある類似について」（1797年にハレで刊行）において、カントの宗教論に、或る種の「神秘家 Mystiker」[VII 74] が現に実践しているというその意味での「ミスティシズム」を見て取ったのを受け、おそらくはこの論旨をそもそも自説の誤解に基づくものと判断したカント<sup>(41)</sup> になりかわって、教え子でもあるヤッハマンが論駁書を上梓した——という経緯に沿うなら、カントから見て「超感性的経験の可能性というたわごとを考えている」のはヴィルマンズその人ということになる。



本稿の関心からして見逃し難いのは、ヴィルマンズもヤッハマンも揃って、当代の稀少な用例となり得るであろう Mysticismus という単語を（前者はラテン文で）用いているのとは対蹠的に、当のカントは件の序文中、奇妙にもこの語を一切用いず、語としてはむしろ由緒正しい Mystik をもってヴィルマンズの言う「ミステシズム」に対峙していることである。これはいかなる意図によるものであろうか。カントはここで、ヴィルマンズに対して、それに相当する主張を自分はしていないし、それは（カントから見ると）そもそも語の正しい意味での「ミステシズム」ですらないと、言外に申し立てているのではないだろうか。

そのような解釈を促す手掛かりを与え得るのは、他の箇所ではさておき、ここでは、カント自身が、「神秘説はあらゆる哲学とは正反対の代物である」、つまりは、「神秘説」は端的に「哲学」でない<sup>(42)</sup>、という強い調子で、「神秘説」を、克服され廃棄されるべき代物として、はっきり否定的に位置付けている事実である。これは、原理上その「哲学」性が全面的に否定されるべき事柄について、ヴィルマンズがしているように（Mystik ではなく）Mysticismus という語を用いるのは場違いである、というカントの暗黙の主張を示唆し得るものではないだろうか。実際、カント自身によって「理性——啓示。自然——恩寵」との見出しが付けられヴィルマンズの名への言及も見られる最晩年の『宗教哲学についての覚書』第 8105 番では、「法則が人間に命じる事柄を人間がなすこと、このことは彼によって要求され得る。それを人間が好んでなすこと、このことは〔彼自身によっては〕要求され得ない。照明説 Illuminatism はミステシズムからは区別される。自然と恩寵についての古い闘争（ミステイク）について。」[XIX 647; Refl.8105] 云々と述べられ、カントの批判する「照明説」[Vgl. VI 53; 102] からミステシズムは擁護される一方、ミステイク（神秘説）は「自然と恩寵についての古い争い」という神学的問題構制を指して用いられるといった仕方で、ミステシズムとの間に明確に一線が画されている。この事実をも念頭に置くなれば、「神秘説」とは違って、「ミステシズム」は、カントの批判的思考において必ずしも全否定されるわけではない<sup>(43)</sup> のであって、「ミステシズム」には、人が哲学する上で、もちろん消極的ないしは反面教師的な仕方ではあるものの、なお一定の役割が割り振られている、とも解し得るのではないだろうか。

この見通しを具体的に確かめるべく、前節で触れた『諸学部争い』序文のための準備原稿におけるミステシズムを改めて取り上げよう。そこでは次のように自問されていた。「それにしても、聖書の読者ないし人民がかの学術的解釈学を理解すべきであり、しかも、かのミステシズムないし文字の信仰に転落していないとの確信をもってそうすべきであるなら、それはいかにしてか」[XXIII 424]。カントの見るところでは、「聖書の読者ないし人民」は、聖書に接するに際して、「ミステシズムないし文字の信仰に転落」する危険と常に裏腹なのである。この場合のミステシズムとは、公刊された『諸学部争い』に見られる解説的表現によるなら、「超自然的な靈感に自分が与り得るとする人民の私念 Meinung としてのミステシズム」[VII 60] を意味するであろう。

以上の理解に基づくなら、カントの言うミステシズムとは、こんにち「神秘主義」という定訳に

において了解されるように、或る一定の傾向の思想教説（例えば誰某のミスティシズムといったような）を指すというよりも、むしろ、それへの注意ないし警戒を一瞬たりと怠るならば誰であれそれに陥る危険に絶えず曝されているような、頹落の迷宮へと人を誤導してしまう類のこころの作用機能を指すものと考えられよう。すなわち、カントの術語を用いてより一般的に定式化するなら、ミスティシズムとは、ともすればおのれの自律を見失いかねない人間の理性それ自身が、本来的に抱え込んでいる危うい自棄作用の謂であるに他ならない。こうした解釈の妥当性は、同じく『諸学部の争い』に見られるミスティシズムの次のような用法からも裏付けられよう。カントは言う、「こうして、魂を欠いた正統主義と理性を殺める vernunfttötend ミスティシズムとの間に、聖書をよりどころとする信仰の教説がある。それは、理性を介して私たち自身に基づいて展開され得る」、と [VII 59]<sup>(44)</sup>。

### 結語 神秘機能としてのミスティシズム

ミスティシズムが前節に論じた意味でのこころの作用機能であるなら、批判的認識論における Schematismus のその作用的性格を重く見てこれを「図式機能」と訳すのがしばしば適切であるように、Mystizismus も「神秘機能」と訳すのが事柄に即していると言えるかも知れない。それは、自己統御を怠るならばその途端に我知らず発揮してしまう、まことに厄介な、しかし、どの時代、どの地域に生きる誰にとっても他人事ではあり得ない、他ならぬ人間のこころのはたらきなのである。カントの眼から見れば、キエティスムやピエティスムはその実例として位置付けられることになる。カント自身は、第二批判の範型論において、「或いは象徴として役立つかも知れないにすぎないものを図式とし、すなわち、[宗教的心術からすれば] 現実的ではあるものの感性的ではないもろもろの直観（神の見えざる国の）を道德的諸概念の適用の根底に置き、熱狂的なものへと彷徨い込む、実践的理性のミスティシズム」について語る [V 70f.]。このミスティシズムを、「実践的な純粋理性が人間性に対して設定した限界を踏み越える」[V 85] という仕方でともすれば発揮してしまう [Vgl. VIII 335]、そういった理性の神秘機能の典型として、今や把握することができるであろう<sup>(45)</sup>。

そして、こうした神秘機能の根源的な存在こそが、他面において理性批判の絶えざる遂行が要請される所以でもある。人間理性にはミスティシズムが言わば棲みついている。そこからする名状し難い不安感のゆえに、言い換えるなら、ミスティシズムの存在を言わば否定的媒介として、理性批判の必要もまた自覚されてくるのである。カントの批判的思考において、「ミスティシズム」には、「神秘説」とは違って、なお一定の役割が割り振られているであろうと前節で述べたのは、この事情に由来する。

第一批判の第二版（1787 年刊）序文においてカントは次のように吐露している。「何か或る形而上学 irgendeine Metaphysik はいつも存在してきたし、多分これから存在することだろう。しかし、それとともに、純粋理性の弁証性というものもまた存在することだろう。なぜなら、弁証性が理性の中に見出されることは理性にとって自然なことだからである」[B XXXI]。目指されるべき「学としての形而上学」へのプログラムが示される第一批判における思弁的理性に対する批判の後にすら、「何か

或る形而上学」すなわち「理性的宇宙論」や「理性的神学」<sup>(46)</sup>への関心は、執拗に残り続けることをカントは認め、その原因として、人間理性に抜き難く根差しこれを仮象の住処たらしめる弁証性を挙げるのである。この指摘こそ、理性批判の営みが、その実質に鑑みるならば、18世紀ドイツの一哲学者の成し遂げた単にローカルで一過的な出来事どころではなく、理性の主体である限り、後世の各人が絶えず自覚的に着手する必要がある課題であること<sup>(47)</sup>を証して余りあるものと言えよう。カントによれば、「批判の道は依然として開かれているのである」[A856/B884]。この意味で、ミスティシズムに対峙することは、現代にまで開かれた課題である。なるほど確かに、カントは、上に引用した第一批判の文脈でミスティシズムに言及してはいない。しかし、本稿の論究成果に照らすならば、理性批判とは、その一面において、人間理性に潜む神秘機能としてのミスティシズムと不断に対決しこれを調教することに他ならないのであり、逆にこのことが永久革命さながらに理性批判の営みを駆動し続けるのもあろうこと、このことは明らかだと言ってよいのではないだろうか。

以上、本稿では、「ミスティシズム」という語彙の成立が、18世紀のカントにまで確かに遡り得ること<sup>(48)</sup>、さらに、カントにおいてこの術語が、*HWP*が事実報告の水準で述べるように古来の「神秘説」と等価的に言い換えられる単なる同義語であるにとどまらず、むしろカント固有の理性批判の根本意図と密接する意義をもち得るものであることを、17・18世紀ヨーロッパにおけるミスティシズムとしてのキエティズムやピエティズムの、神学者モスハイムの著作をあり得べき接点とする影響作用をも視野に収めながら、明らかにした。

## 【註】

カントの文献から引用する際は、慣用に従い、『純粹理性批判』（本稿では第一批判と記す。他の批判書も同様）のみ第1版（1781年刊）をA、第2版（1787年刊）をBと記し、アラビア数字で各原版の頁付を添えたものを併記し、他はプロイセン王立学術アカデミー（およびその継承機関）版全集に拠り、巻数をローマ数字、頁数をアラビア数字で併記したものを角括弧に包んで典拠を示す。原著者による強調は丸い傍点で示す。

- (1) 『岩波 哲学・思想事典』、1998年、の当該項目は冒頭にこれらの英独仏語を掲げている。
- (2) 鶴岡賀雄「グノーシス主義とキリスト教神秘主義」、63頁（大貫隆・島蘭進・高橋義人・村上陽一郎編『グノーシス 異端と近代』、2001年、61-72頁、所収）。
- (3) P.Heidrich / H.-U.Lessing: Art. „Mystik, mystisch“, in: J.Ritter / K.Gründer (Hg.): *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, 12Bde., Darmstadt 1971-2004 [=HWP], Bd.6, Darmstadt 1984, S.268-279, bes.S. 270-274.
- (4) カントにおける「神秘説、神秘的」の用法の諸相と哲学史的な奥行きとについてなら、むしろ次の論考に詳しいが、*HWP*の同項目では言及されていない。H.Heimsoeth: „Kant und Plato“, in: *Kant-Studien*, 56Jg., 1966, S.349-372.
- (5) 同所で呈示されるこの語の本義を原文のまま引用しておく。“The opinions, mental tendencies, or habits of thought and feeling, characteristic of mystics; mystical doctrines or spirit; belief in the possibility of union with the Divine nature by

means of ecstatic contemplation; reliance on spiritual intuition or exalted feeling as the means of acquiring knowledge of mysteries inaccessible to intellectual apprehension.”

- (6) F. Neumann: „Mosheim und die westeuropäische Kirchengeschichtsschreibung“, in: M. Mulsow, R. Häfner, F. Neumann u. H. Zedelmaier (Hg.): *Johann Lorenz Mosheim (1693-1755) Theologie im Spannungsfeld von Philosophie, Philologie und Geschichte*, Wiesbaden 1997, S. 111.
- (7) 正確な表題は長大である。米国議会図書館が 1975 年に刊行した *The National Union Catalog Pre-1956 Imprints* 第 397 巻 383 頁の中列 (NM 0816503 PPL) に掲載されている同書の書誌は次の通り。“Mosheim, Johann Lorenz, 1694?-1755. [/] An ecclesiastical history, antient<sup>[sic]</sup> and modern, [/] from the birth of Christ, to the beginning of [/] the present century: in which the rise, progress, [/] and variations of church power are considered [/] in their connexion with the state of learning [/] and philosophy, and the political history of [/] Europe during that period. By the late learned [/] John Lawrence Mosheim. Translated from the [/] original, and accompanied with notes and [/] chronological tables, by Archibald Maclaine. [/] To the whole is added an accurate index. [/] London, Printed for A. Millar, 1765. [/] 2v, 25cm. [/] I. Maclaine, Archibald, 1722-1804, tr.” なお、近年の研究書はモスハイムの生年を 1693 年と同定している (Vgl. z.B. M. Mulsow u.a. (Hg.): *Johann Lorenz Mosheim (1693-1755)*, Wiesbaden 1997)。 *Deutsche Biographische Enzyklopädie* の当該項目も同様である。本稿もそれらに従うことにする。
- (8) *Institutionum historiae ecclesiasticae antiquae et recentioris libri quatuor*, Helmstedt 1755.
- (9) Vgl. Neumann: a.a.O., S. 134.
- (10) ラテン語原著では第 17 篇「キリスト教史」・第 2 部「個別教会史」・第 1 節「古代教会史」・第 1 章「ローマまたはラテン教会史」の第 50 節であるが、英訳書では OED が指示するように第 51 節である。
- (11) キリスト教のこと。英訳からの訳文に出る「宗教」も同じ。
- (12) モスハイムのラテン語原著については、Maclaine 訳のほか 1832 年にはより正確な James Murdock 訳が刊行され、その後は後者のほうが改訂と再編集を重ねて米国にまで流布した、という事実もまた、Maclaine 訳の精度をおよそのところ推測させるに足るものであろう (<http://www.braineyencyclopaedia.com> 収録の項目 „Johann Lorenz von Mosheim“ による。この記述は 1911 年版の大英百科事典 *Encyclopaedia Britannica* の記述を参照している)。なお *Deutsche Biographische Enzyklopädie* 所収の項目 „Mosheim“ によれば、件のラテン語原著は「とりわけ英訳のかたちで文書として類例のない成功を収めた (1892 年までに 71 刷)」とあるが、両訳書の重版回数を通算したものと思われる。
- (13) R. Goclenius: *Lexicon philosophicum*, Frankfurt 1613 [u. Marburg 1615].
- (14) K. Aso et al. ed.: *Onomasticon philosophicum latinoteutonicum et teutonicolatinum*, Tokio 1989.
- (15) 20 世紀初頭に刊行されたゲオルゲスの羅独辞書でも事情は同様である。なお、語尾に -ismus を取るラテン語に実は「近代ドイツ人が勝手にこしらえた擬似ラテン語」(小林標『ラテン語の世界——ローマが残した無限の遺産』2006 年、193 頁) がまま見られることをここで想起してもよいかも知れない。
- (16) 『キリスト教神秘主義著作集』第 15 巻、教文館 [1990 年]、は「キエティスム」と題し (以下この書を『キエティスム』

と略記する)、モリノス (Miguel de Molinos, 1628-1696)、ギュイヨン夫人 (Jeanne-Marie Bouvier de La Motte, dite M<sup>me</sup> Guyon, 1648-1717)、スュラン (Jean-Joseph Surin, 1600-1665)、フェヌロン (François de Salignac de La Mothe-Fénelon, 1651-1715) らの著述を収録している。

- (17) 「キエティズム」について『岩波 哲学・思想事典』、1998 年、の岡部雄三氏による当該項目の記述は主にキリスト教史の観点から簡潔な説明を与えている。哲学史的関心からすれば、17 世紀にライプニッツやマルブランシュがそれに対して批判的態度を取る一方、18 世紀ドイツ語圏に対しては「啓蒙の克服」という文脈でノヴァーリスや初期ヘーゲルに影響を与えた、とされる点が注意されよう (Vgl. P.Nickl: Art. „Quietismus“, in: *HWPPh*, Bd.7, Darmstadt 1989, S.1835f.). 『人間知性新論』序文で、Averroistes と並んで Quietistes に言及される箇所 (G.W.Leibniz: *Nouveaux essais sur l'entendement humain*, in: C.I.Gerhardt (Hg.): *Die Philosophischen Schriften*, Berlin 1882, Bd.5, S.52) に、工作舎版邦訳は次のような註を付している: 「「静寂主義」は、受動的な瞑想のなかに心の平安を求めた一七世紀の神秘的キリスト教。ローマ・カトリック教会内部における運動で、受動的瞑想と神の意志への完全な服従が強調された。フェヌロンの表現を使えば、「恩寵のすべての風に吹かれる羽毛のように」を理想とする。この「聖なる無関心」が達成されたとき、表に現われた行動は、道徳的には有意味でなくなる。個人の主体的な自由意志が否定されているからである。静寂主義の主な唱道者は、スペインやイタリアではモリノス Miguel de Molinos (1627-1697<sup>[ママ]</sup>)、フランスではギュイヨン Jeanne Marie Guyon (1648-1717) とフェヌロン François Fénelon (1651-1715) である。ギュイヨンもフェヌロンもモリノスの *Guida spirituale* [『霊の導き』] (1675) から大きな感化を受けた [—— この点に関して、鶴岡賀雄「解説と解題 モリノス」、『キエティズム』所収、504 頁、は、モリノスが異端宣告を受けこの書も禁書とされたことから、否定的見解を採る]。ライプニッツは、静寂主義は [—— 「物質の永遠性を信じ、すべての人類が唯一の知性に与っていると考え」個人の「自由意志を否定しうる」とする ——] アヴェロエス主義ではないかと考え、この運動にはまったく共感を示さなかった。『形而上学叙説』四節で、未来に関しては静寂主義者であってはならないと述べており、本書 [『人間知性新論』] 第 4 部 12 章でも静寂主義者の怠惰を非難している。[以下略]」(谷川多佳子・福島清紀・岡部英男訳『ライプニッツ著作集 第 4 巻』1993 年、30 頁註 73 [「アヴェロエス主義」に関しては註 72])

- (18) このことを OED1989 年版は “This female apostle of Mysticism” の直後に [sc. Madame Guyon] と適切に補足することで明示している。
- (19) もちろん、キエティズム以外の思想潮流をも指して mysticism の語が用いられていた可能性が事実上絶無だと断言することはできないだろうが、OED からは確認できないので本稿では問題にしない。
- (20) 彼が複数の教養ある英国商人と親しく交流していたことはよく知られている。
- (21) Vgl. dazu E.Adickes' Vorwort zu Kants Reflexionen zur Metaphysik [XVIII, S.V].
- (22) J.A.Eberhard: *Vorbereitung zur natürlichen Theologie zum Gebrauch akademischer Vorlesungen*, Halle 1781, abgedruckt in: Bd. XVIII der *Kant's gesammelten Schriften*, S.491-606.
- (23) R.Cudworth: *systema intellectuale hvjvs vniversi sev de veris natvrae rervm originibvs commentarii*. [...] Joannes Lavrentivs Moshemivs omnia ex Anglico Latine vertit [...], Jena 1733. このラテン訳には訳者モスハイムにより原著本文

の2倍に及ぶ分量の周到な註解が付されている。この版は1845年に訳註ともども John Harrison によって改めて英語に移された (R. Cudworth: *The True Intellectual System of the Universe*, 3 vols. London 1845, repr. Bristol 1995)。

- (24) J.J.Brucker: *Historia critica philosophiae*, 6Bde., Leipzig 1767, ND Hildesheim / NY 1975. ブルッカーの哲学史叙述の特質を詳細に検討することは今後の課題であるが、カントによる批判的受容のありように関して見通しを提示するものとして次の議論を参照のこと: 福谷茂「「伝統」の発明と哲学的アカデミズムの成立——カントとクーザンの場合」、京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」編集発行『ACADEMICA——学の制度と規範』2004 年、65-72 頁、所収。

- (25) その一例として次を参照: C.W.T.Blackwell: “The new histories of logic and the characterization of development in philosophy”, in: W.Schmidt-Biggemann / T.Stammen(Hg.): *Jakob Brucker (1696-1770). Philosoph und Historiker der europäischen Aufklärung*, Berlin 1998, pp.212f. なお、モスハイムとの関係について述べると、ブルッカーは、全7巻からなる自著 *Kurtze Fragen aus der philosophischen Historie* [...], Ulm 1731-1736 のうち 1734 年に刊行された第5巻を、1732 年以来ライプツィヒのドイツ協会会長を務めていたモスハイムに献呈している。Vgl. U.Behler: „Eine unbeachtete Biographie Jakob Bruckers“, in: Schmidt-Biggemann / Stammen(Hg.): a.a.O., S.47, Anm.133.

- (26) Vgl. U.J.Schneider: „Das Eklektizismus-Problem der Philosophiegeschichte“, in: ebd., S.140f. u. S.140, Anm.7.

- (27) Vgl. A.Warda: *Immanuel Kants Bücher*, Berlin 1922, S.47.

- (28) M.Oberhausen / R.Pozzo(Hg.): *Vorlesungsverzeichnisse der Universität Königsberg (1720-1804)*, 2Bde., Stuttgart Bad-Cannstatt 1999. なお 18 世紀の同大学に関しては以下の邦語文献が貴重な情報を簡潔に提供している。R・ポッツォ(御子柴善之訳)「18 世紀ケーニヒスベルク大学史」、同「18 世紀ケーニヒスベルク大学の講義要項」、坂部恵他編『カント事典』1997 年、577-584 頁、所収。

- (29) P.Miller (Hg.): *Compendium Moshemianarum institutionum historiae ecclesiasticae*, Helmstedt 1751; C.E.v. Windheim (Hg.): *Kurze Anweisung, die Gottesgelahrtheit vernünftig zu erlernen*, Helmstedt 1756.

- (30) 前註 27 に挙げたヴァルダの蔵書目録にも、ルストによる「カントが手にしたこと」の明白な、宗教・宗教史・宗教哲学・キリスト教神学の各分野の書籍刊行物一覧 (H.Rust: *Kant und das Erbe des Protestantismus*, Gotha 1928, S.7-26) にも、モスハイムの著書は見出されない。ルストは、カントは全ての蔵書に目を通したわけではないとし、公刊著作での言及に加え蔵書については書き込みの有無を手掛かりに、カントが実際に読んだらしい書物を洗い出したようである。そのためか、ヴァルダの目録には見られるカドワースのラテン訳 (前註 23) をルストは挙げていないが、カントの思想形成へのカドワースの影響がそれでも疑い得ないことは、ヘンリッヒも強調する通りである (Cf. D.Henrich, ed. by D.S.Pacini: *Between Kant and Hegel: lectures on German Idealism*, Cambridge Mass. 2003, p.68)。また、カントには、書店から新刊書を届けさせ目を通してすぐ返却するという習慣があった (Vgl. Rust: a.a.O., S.8) から、書き込みどころか蔵書目録にない書物についてすらもカントがその内容を知っていた可能性はやはり残り続けるのである。

- (31) 原文は „von inneren Eingebungen oder opinion“ だが、アディッケスは公刊された『実用的見地における人間学』(1798 年刊) の本文 [VII 216f.] と比較し、そこ同様に opinion を opium に読むべきかと註記している。ここではアディッケスの提案に従って原文を改めて訳した。

- (32) 判読困難のためアディクセスは „Böhme?“ (ヤーコプ・ベーム?) とともに註記している。
- (33) Vgl. N.Hinske: „Zur Verwendung der Wörter ‘schwärmen’, ‘Schwärmer’, ‘Schwärmerei’, ‘schwärmerisch’ im Kontext von Kants Anthropologiekolleg. Eine Konkordanz“, in: *Aufklärung*, 3/1, 1988, S.73-81, bes.S.75. 或いは些事に映るかも知れないが、この点を確認しておくことは無意味どころではない。カントは Guyon としか書き付けていない以上、これがカントの蔵書中に見出される或る書物の同名の著者 Claude Marie Guyon (1699-1771) である可能性を排除して、積極的に Madame Guyon に特定すること自体、テキストの内容理解と無関係にはなされ得ない事柄だからである。Vgl. Warda: a.a.O., S.49.
- (34) 『遺作 *Opus Postumum*』にも「モラヴィア兄弟団員 Mährische Brüder、ヘルンフート兄弟団員 Herrenhuter」とある [XXI 57]。より正確には、もと 15 世紀ベームンに成立した自由教会的な信仰団体の末裔で、17 世紀ハプスブルク家によるチェコの再カトリック化以後もメーレン (モラヴィア) で細々と信仰を継承していた前者が、信仰の自由を求めて出国し、18 世紀初頭にザクセンで再組織化されたのが後者である。「モラヴィア兄弟団の指導者は C・ダーヴィトという大工 (1690-1751) でハレの敬虔主義の影響を受けた人であった。」(大貫隆他編『岩波キリスト教辞典』2002 年) それゆえ、「ヘルンフート兄弟団 Herrnhuter Brüdergemeinde」もまた、広義の「敬虔主義の信徒たちが作った共同体」という性格をもつ (同)。しかし、カントは「モラヴィア兄弟団」や「ヘルンフート兄弟団」とは区別して「ピエティスト」という表現を用いているので、HWP の項目 „Pietismus“ の記述も指摘するように、カントは「ピエティスト」という語で特に「ハレの敬虔主義」者のみを指していると考えられる (Vgl. auch U.Sträter: „Aufklärung und Pietismus – das Beispiel Halle“, in: N.Hammerstein (Hg.): *Universitäten und Aufklärung*, Göttingen 1995, S.49-61, bes.S.50f.)。本稿でも「ピエティスト」ないし「ピエティスムス」をこの意味で理解する。なお、小倉志祥『カントの倫理思想』1972 年、79-80 頁、をも参照のこと。
- (35) 岩波版カント全集所収『人間学』の訳者渋谷治美氏が適切に補っているように、聖書のこと。
- (36) 村田真弓氏によれば、「ある日、彼女 [ギュイヨン夫人] がフランシスコ会の修道士に出会い、その修道士から「奥様、あなたはあなたの心の中にお持ちのものを外に求め、見つからないで苦しんでいらっしゃるのです」と言われて目の覚める思いをしたというエピソードは、彼女の信仰の関心が、信仰の内面化を目指し、観想を祈りの理想的形態とみなす神秘主義の流れの中にあつたことを示している」(同氏「解説と解題 ギュイヨン夫人」、『キエティスム』506 頁所収)。
- (37) この見通しがほぼ正しいであろうことは、1798 年に刊行が開始された G・S・A・メリン (1755-1825) による『批判哲学百科事典』第 4 巻第 1 分冊 (1801 年刊) で „Mysticismus“ を引くと、そこに本文はなく、„Schwärmerey“ (第 5 巻第 1 分冊、1802 年、所収) を参照指示される事実からも裏付けられる。Vgl. G.S.A.Mellin: *Encyclopädisches Wörterbuch der Kritischen Philosophie*, 6Bde., Jena / Leipzig 1798-1804.
- (38) C・Ch・E・シュミート著『カント著作簡易用語辞典』(増補第 4 版、1798 年) は „Mysticismus“ の項目を立てるが見出し語として „Schwärmerey“ も併記する。この項目での具体的なカント文献の言及箇所は [B882], [V 141], [V 70] だが、(mystisch は別として)「ミスティシズム」という語が見出されるのは [V 70] のみに過ぎず、Schwärmerey に至つてはいずれの箇所でも用いられていない。それにもかかわらず見出し語に „Schwärmerey“ が掲げられる事実から、この語の一般的な流通度の高さと、これに反して「ミスティシズム」というドイツ語の言い回しがなお馴染みの薄いものであつ

ただろうことが、推し量られよう。Vgl. C.Ch.E.Schmid: *Wörterbuch zum leichtern Gebrauch der Kantischen Schriften*, 4.vermeh. Ausg., Jena 1798, ND Darmstadt 1976, 2.Aufl., 1980. なお、前註 3 で触れた *HWP* の項目「神秘説、神秘的」は、Mystizismus と Schwärmerei のカントにおける混用を、「18 世紀後半および 19 世紀に始まった広範な言語使用」の一事例として報告するにとどまり、19 世紀に先立つ 18 世紀固有の用例を示す労を省いてしまっており、本稿が前註と本註で指摘した事実にも触れていない。別の項目「狂信」では、カントにおけるミスティシズムの語法との関連には特に言及されていない (Vgl. W.Schröder: Art. „Schwärmerei“, in: *HWP*, Bd.8, Darmstadt 1992, S.1479f.)。

- (39) 磯江景孜『ハーマンの理性批判——十八世紀ドイツ哲学の転換』1999 年、29 頁。ハレのピエティストの領袖 P・J・シュペーナーは、「異教の道德哲学がやっているように[...] 心情に基礎を置くべきである。心情に由来しないものはすべて偽善であるということを示すべきである」と説教したという (同所)。ところで、周知のように、カント倫理学をやはり一種の「心情倫理」と見なす批判や、この「心情倫理」をピエティズムの哲学的再版と見る議論が古くから行われている。この場合に「心情倫理」として同類視されるカント倫理学とピエティズムとは、しかし実のところ、「理性の自律」に則るか否かの一点において、思想としては根本的に水準を異にするものである。なお、伝記的見地から後者に類する議論に疑問を提起する近年の論考として、cf. M.Kühn: *Kant. A Biography*, Cambridge, Mass. 2001, pp.39f.; 53f.

- (40) 本稿前註 17 にて言及したモリノス『霊の導き』(1675 年) は、「一六八七年のモリノスの異端宣告を待っていたかのよう」(鶴岡「解説と解題 モリノス」、『キエティズム』504 頁)、まず 1687 年にライプツィヒで、シュペーナーの影響下にあったハレのピエティスト A・H・フランケによってラテン語に、1699 年にはフランクフルトで G・アルノルトによってドイツ語に、それぞれ移された (Vgl. Nickl: Art. „Quietismus“, in: *HWP*, Bd.7, Darmstadt 1989, S.1836f.)。カトリック圏では異端と断じられる者まで出したキエティズムの思想潮流は、「こうして、プロテスタント圏では古代以来の神秘主義の伝統に組み入れられて、新たな神秘主義思潮の形成に一定の役割を担うのである」(鶴岡前掲解説)。

- (41) カントはこの論文の梗概の記されたヴィルマンスの書簡を、本人の了解を得て『諸学部争い』に付録として収録したが、その冒頭で「私は私の考え方と彼の考え方との類似 [という彼の申し立て] を無条件で認めるつもりはない」と断っている [Vgl. VII 69-75]。カントによるヤッハマン著への序文のケンブリッジ版英訳における訳者ウッドもまた、ヴィルマンスの論旨を「馬鹿げたもの」と見なしている (cf. A. Wood: “Translator’s introduction to Preface [...]”, in: A. Wood / G.D.Giovanni: *Religion and Rational Theology*, Cambridge 1996, p.331)。自著にわざわざ付録まで設けて他人の見解を紹介することそれ自体に、かつて『プロレゴメナ』でそうしたのと同じ動機が問わず語りのうちに現れていると解するのが順当であろう。

- (42) 類似の断言はこの序文への準備原稿にも見られる [Vgl. XXIII 467]。

- (43) 第二批判において「ミスティシズムは道德法則の純粹さや崇高さと矛盾しない」と言われるのはその例である [V 71]。

- (44) 本稿では「ミスティシズム」という語形とその意味内容だけを問題にしている。「聖書をよりどころとする信仰の教説」を本来的だとするカントの文脈上の主張の吟味評価は別次元の問題であり、今は立ち入りを控える。直後の文言によれば、これが「実践理性の批判主義に基づいた真の宗教説」だとされる。この「批判主義 Criticism」というお馴染みの表現も、カントの立場をまたぞろ繰り返すものと単に皮相的に受け流してしまうべきではない。『諸学部争い』



では唯一の用例であり、しかもここでは、文脈上、前出の「ミステシズム」との対比が明瞭に意図されているからである。その限り、むしろ、本節で解釈したような「ミステシズム」の含意と同じく、理性の有する批判的な作用機能というその含意にこそ注意が払われるべきであろう。「理性の批判機能」については、B・ハーマン編/J・ロールズ（坂部恵監訳）『ロールズ哲学史講義（下）』2005年、373頁、を参照のこと。

- (45) この読み方を私は拙著『＜根源的獲得＞の哲学——カント批判哲学への新視角』2005年、100頁、で提起しておいた。本稿はその妥当性を証示するための補論としての性格をも併せもつ。
- (46) 久保元彦「内的経験（五）」197頁、同著『カント研究』1987年、所収。
- (47) なお、このことは、第一批判「純粋理性の歴史」節において「批判の道」それ自体が一つの（最後のな）「革命」として際立たせられること、また、同書第二版序文において「思考法の革命」が「或る個人[すなわちカント]において或る時点において生起し、それが共有され公共のものとなることによって人間の認識をそれまでの「暗中模索」から、直とした「学の確実な道」の歩みへと一挙に転換する出来事」として語られること（福谷茂『『純粋理性批判』における歴史の問題』249, 257頁、工藤喜作・齋藤博・澤口昭聿・米澤克夫編『哲学思索と現実の世界』1994年、245-272頁、所収）と、何ら矛盾しない。カントの言うごとく、人は哲学を（あたかも第三者の築いた知識体系を習得するかのようにして）学ぶことはできず、ただ哲学することだけを学び得るのだとすれば、後世の各人は、カントが企てた「思考法の革命」をそのつど自ら実現すべく自覚的に「哲学する」よう努める以外にない、と考えられるからである。
- (48) 坂部恵氏によれば、「創造の究極の高みに迫ることをこころざす「哲学的・神学的思考の語り」を「神秘主義」と規定して、ときに反合理的、反知性的なものに見なすようになったのは、実は比較的新しく一八世紀終わりから一九世紀はじめにかけてくらいからのことです」（同氏『ヨーロッパ精神史入門——カロリング・ルネサンスの残光』1997年、35-36頁）。「神秘主義」の語の初出時期に関して本稿の論究成果は、ここでの坂部氏の見解を大筋で支持し得るものである。

<付記> 本稿はカント研究会第205回例会（2006年9月23日、於早稲田大学）で行った研究発表「カントと「ミステシズム」の問題」を改題し、これに若干の修訂を施して成立した。有益な示教を与えられた会員諸兄に謝意を表する。また本稿は2005年度大東文化大学長期海外研究員（在ドイツ・マールブルク大学哲学科）としての研究成果に相当する。

（2006年9月25日受理）